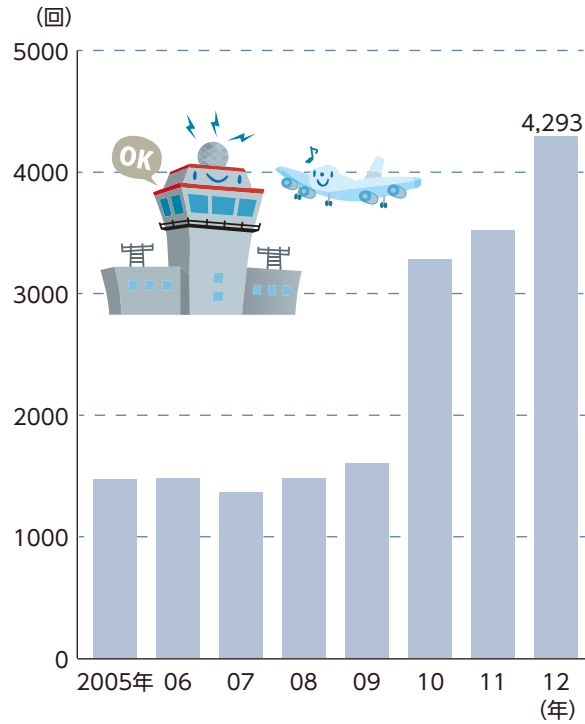


● 国際線の着陸回数  
(2012年)



4,293回

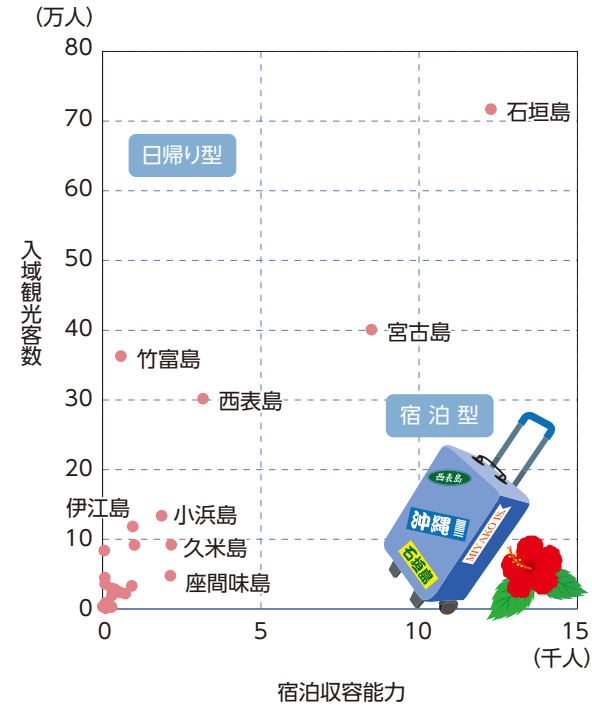
沖縄では、外国人観光客のさらなる増加や国際物流拠構築を目指し、さまざまな施策が展開されている。そのひとつとして、国際線の拡充が進んでおり、航空路線の新設や便数の増加が続いている。国土交通省「空港管理状況調書」によると、2012年の那覇空港国際線への着陸回数は4,293回。2008年と比較すると、5年間で3倍近くまで増加している。

国際定期便では、航空会社10社が参入し、台湾、中国、香港等の7都市と結ばれている。また、ANAの物流ハブ事業においても、24時間体制で、アジアの5都市と結ばれている。一方で、滑走路のキャパシティの問題が懸念されており、現在は滑走路の稼働率を上げて対応している状況だ。

観光、物流の今後の成長、着工された第二滑走路の完成を考慮すると、国際線の利用回数は今後増加傾向が続くとみられる。

(海邦総研・瀬川孫秀)

● 離島の宿泊収容能力  
(2012年3月31日現在)



37,225人

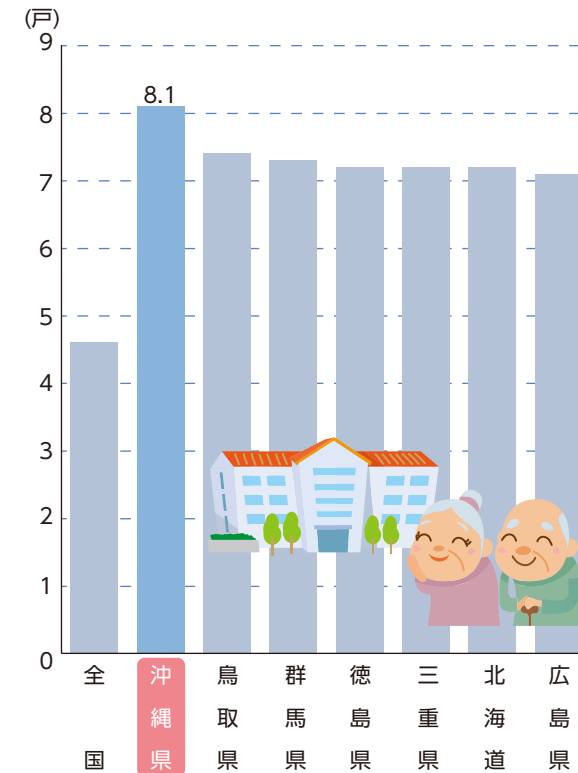
新石垣空港の開港以来、新規路線就航により八重山地域へ直接入域する観光客が増えている。また、船舶を利用して周辺離島へ足を延ばす人も多い。では、県内離島に、宿泊施設はどのくらいあるのだろうか。沖縄県「離島関係資料」によると、県内離島に所在するホテルや旅館、簡易宿泊所などの宿泊施設数は1,227軒。宿泊収容能力は37,225人にのぼる。

島ごとの宿泊収容能力と入域観光客数との関係を見てみると、県内離島は大まかに、訪問時に宿泊を伴う「宿泊型」と、宿泊を伴わない「日帰り型」に分類できる。本島からアクセスが容易な伊江島や、石垣島経由で多くの人が訪れる西表島は日帰り型の最たる例だ。

観光では、宿泊によって地域への経済効果が現れる。県民もゆっくりと離島滞在を楽しみ、離島経済へ貢献してはどうだろうか。

(海邦総研・堀家盛司)

● サービス付き高齢者向け住宅  
(2014年3月末時点・65歳以上人口千人当たり)



8.1戸

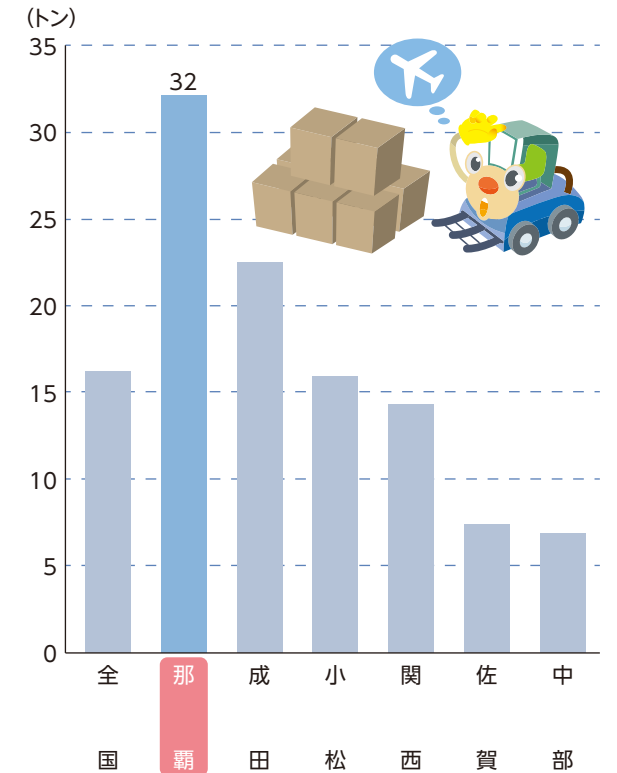
沖縄の高齢者世帯は2035年に約4割となる見通しだ。高齢化が進む中、国土交通省が整備を進めているのが「サービス付き高齢者向け住宅」。バリアフリー対応で、介護・医療の連携サービスが受けられる住宅として注目されている。

一般社団法人すまいづくりまちづくりセンター連合会「サービス付き高齢者向け住宅情報提供システム」によると、県内の戸数は2,099戸。65歳以上人口千人当たりに換算すると8.1戸となり、全国トップの水準となっている。

沖縄は核家族世帯が多いこともあり、県の調査結果でも需要があると考えている市町村は多い。また、施設不足から全国で40万人以上の待機老人がおり、都市部の高齢者の地方移住も増えている。

年間を通して暖かく過ごしやすい沖縄。今後も整備が進むことで、高齢者の移住先としての注目もさらに高まりそうだ。(海邦総研・新里治史)

● 国際線の貨物取扱量  
(那覇空港国際線・2012年)



32トン/便

沖縄を拠点としたアジア向けの貿易が活発だ。沖縄ではANA貨物ハブを中心に、ヤマト運輸・楽天などが香港向けに宅配サービスを強化している。昨年11月には沖縄大交易会プレ交易会も開催された。国内外のサプライヤー、バイヤーが参加する日本最大規模の商談会となった。

国土交通省「空港管理状況調書」をもとに、2012年の那覇空港国際線1便当たりの貨物取扱量を算出すると、32トンとなっている。これは全国の国際線を有する空港の中で第1位の水準だ。

ANA貨物ハブでは海外就航地を当初の5カ所から8カ所へ増設。チャイナエアラインも沖縄からの物流増加に対応し、大型機材の導入を予定している。沖縄を拠点とした物流の動きは、新しいステージに突入したようだ。国内とアジアを結ぶ沖縄に対する注目度が今後さらに高まると予想される。(海邦総研・中山禎)